令和７年度　宇美町戦没者合同慰霊祭　町長挨拶

令和７年４月 17 日（木）

春のあたたかな光の下、本日ここに、宇美町戦没者四百五十一柱の御霊をお迎えして、ご遺族ならびに来賓各位のご列席を賜り、令和７年度合同慰霊祭を執り行うにあたり、謹んで慰霊の言葉を捧げます。

世界で数千万人にも及ぶ尊い命が失われた先の大戦から、今年でちょうど 80 年という節目の年となります。祖国の安泰を願い、愛する家族を案じつつ、命を捧げた戦没者の最期を思う時、悲痛の念が胸に迫ってまいります。

去る３月 13 日の西日本新聞に、小竹町にある戦争資料館の記事が掲載されていました。

この資料館は、日本で初めて私費で建てられた戦争資料館で、現在の館長　武富 慈海（たけとみ じかい）さんが、旧日本陸軍兵士だった父親の登巳男（とみお）さんから引き継いで運営されています。

わずか 30 平方メートルの資料館の中には、戦地で兵士が書いた日記、弾丸が貫通した水筒、犬や猫の毛皮で作った防寒着など、全国から寄せられた遺品が約二千点展示され、そのほとんどが実際に触れることができ、重さ、硬さ、手触りで戦争当時の記憶を思い浮かべることができます。

登巳男さんは、陸軍二等兵として出征し、９年にわたって戦地を転々とされました。特に満州での任務は過酷を極め、氷点下 30 度の吹雪の中、真夜中に叩き起こされ、重さ 35 ㎏の荷物を背負い、先の見えない目的地まで 25 ㎞の雪道を行軍し、兵士の中には寒さに耐えきれず、自ら命を絶つ者もいたそうです。想像を絶する恐怖との戦いだったと言われています。

登巳男さんは、青春時代のすべてを戦地で過ごし、多くの戦友を失いました。国のために立派に殉じることが美徳とされる時代、自分だけが生き残ってしまったという罪悪感にも似た負い目を感じて、終戦後、四半世紀が過ぎた頃、この資料館を建てられました。

戦争というものの本質と、自身の戦争体験、そして二度と戦争をしてはならないことを伝えるために、自宅で遺品を公開することを決心されたのです。

その遺品の中に、戦地から家族にあてた手紙があります。

「姿こそ見えないが、いつでもお前たちを見ている。よくお母さんの言いつけを守って、お母さんに心配かけないようにしなさい。そして、大きくなったら自分の好きな道を進み、立派な日本人になりなさい。人のお父さんをうらやましがってはいけない。お父さんは、神様になってふたりのことをじっと見ています。」

死を覚悟してこの手紙を書かれた人は、兵士である前に一人の父親です。愛す

る妻と子どもを残して喜んで戦地へ向かう人がどこにいるでしょうか。どこに我が子が戦争で死んでいくことを誇りに思う親がいるでしょうか。

お母さんに会いたい、妻や子と幸せに暮らしたい、そんな思いを心の箱に押し込めて、これまで自分を育ててくれた両親や愛する妻や子どもを守りたいという一心で戦地へ向かったに違いありません。

生前、登巳男さんはこう話されています。

「この遺品の価値を伝えられるのは、私以外誰もいない。私の死後、私に代わってこの遺品たちが、戦場での非人間性、戦争への怒り、悲しみ、戦争そのものの愚かさと空しさ、そして平和への願いを語り続けてくれるだろう。私は、あらゆる戦争に反対する。」と。

世界に目を向ければ、ロシアとウクライナの戦争は、今なお終わりは見えず、また、イスラエルによるパレスチナ・ガザ地区への攻撃によりこれまで 7 万人が亡くなり、10 万人が食料不足の中、劣悪な環境のもと苦しい生活をしいられています。

なぜ人間は、このような過ちを繰り返すのでしょうか。戦争は、一人一人の自由を奪い、幸福の追求を阻むものです。

平和で豊かな今日の繁栄も、戦争の悲惨さとそこには尊い犠牲があったことを次の世代に語り継ぎ、世界の恒久平和を確立することが、私達に課せられた使命であると改めて感じております。

結びになりますが、戦没者の方々の御霊（みたま）がとこしえに安らかならんことをお祈りするとともに、ご遺族の皆様のご多幸を心より祈念申し上げ、慰霊の言葉といたします。

令和７年４月１７日　宇美町長　安川　茂伸